

勝林寺寺報

安樂無量の大菩薩

一生補處にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ
穢國にかならず化するなれ

觀音勢至もるともに
慈光世界を照耀し

有縁を度してしばらくも
休息することなかりけり

お淨土という世界は、如来さまの願いとはたら
き(願力)によつて仕上つてゐる世界です。

でありますから、そのお淨土におまいりした人
は、「必至滅度」といつて如来さまと同じ尊いほ
とけとなるのです。

「滅度」とは、すべての煩惱の火が滅せられ、
あくまでも寂かな、かたよりのない平等な平
静なことです。そういう如来さまと等しいほ
とけになれるのです。

そういう世界がお淨土です。

そういう世界がお淨土だといふと、するとお淨
土は、あくまでも寂かな、ひよつとしたら、動き
といふものが全くない世界であるかのよう受け
とられたりします。

すこし言い方をかえると、淨土・極楽におまい
りできたら、もう何の心配も仕事もない、寝ころ
んでくらせる極めて楽なところなのだと受けと
める人もいます。・とんでもないことです。

お淨土とは、先にも言つたように、如来さまの
(一切衆生を救いたいといふ)大願と行業とによ
つて仕上つてゐる世界です。そしてそこへ往生す
るということは、如来さまの願行のなかにからめ
とられ願行のなかに生れかわるということです。

如來といつしよに、また觀音さま・勢至菩薩さ
まと共々に、「普賢の徳」(一切衆生をあまねく
漏らさず救おうとする如来さまの徳)によつて、

動かずにはおれないのです。獨りに獨つた煩惱の
衆生を見るにつけ罪業深重の凡夫を見るにつけ、
これを必ず化度するため、寂靜のところにじつ
としてはおれないのです。・出來た十方世界を見るにつけ、じつとしておる
ことが出来ないのです。・如来さまのお慈悲と智慧との光のなかで、照し
まして、人の世で、父という母という、また子
や孫という縁あつた人々を、自分と同じように如
来さまの弘誓願・お念仏に遇わせたいと念ずる
つけ、寂靜の地にしばらくも休んでいることが出
来ず、何度も何度も娑婆世界に帰り還つてお念
仏をよびかける仕事に精を出すのが、お淨土の菩
薩です。

このように、お淨土から、またこの迷いの世界
へと還来して、如来さまのお仕事(衆生救済の願
行)にはたらかれる方を「一生補處の菩薩」とも
「還相の菩薩」とも言うのです。

「人が育てなければ、人には育たない」

他の動物、たとえば犬でも猫でも、カンガルーなどはなおさら
それらの赤ちゃんは、産みおとされるやうに、自分の力で母親
の乳をさがし乳房にとりついてやきます。
ところが人間の赤ちゃんだけは、どうしてでしょうか、母親
なり看護婦さんなり他の人が手をくわえ、なにくれと育ててや
らなければ、とても自分一人の力では育ちません。

幾万・幾億あるかも知れない生き物の種類のなかで、ほか
のもの力をいたぐらなければ育たないのは、私たち人間だけで
はないでしょうか。

ですから本来、私のいのちは、生かされて生きているのです。

次に、では人間、どんなものからでも、育てられたたら人として
育つものなのか、一といえば、実はそうではありません。

人間の赤ちゃんが狼に育てられたら、人には育たないで狼の子
とも育つたという話を聞いたことがあります。

人の子は犬や狼に育てられても、人間にはならない。ということ
は、人が人として育つためには、ほんとの人が育てなければ、
ほんとの人間は育ちはしないということです。

この子を救う本当の親にならう。眞の親としてめざめよう。と
はめ励む人のことを仏法で菩薩といいます。その菩薩(ボサツ)
さまの願いの中に願われてこそ、人は人として育てられるのです。

法國菩薩さまは、一切の、ここまことに歩みおぼつかない私の
拠り所となる如来になろうと願を立て南無阿弥陀仏とはだいてく
ださいます。

その如来の智慧の光明に照らされて、はじめて私は、私のすぐた
にめざめ。南無阿弥陀仏の慈悲の名号により通されて、私は始めて
まことの「人」として育てられるのです。

この教えが、「眞実の教」大無量壽經のおしえです。
(「勝林寺テレホン法話」より)

八月のこよみ

住職は八月六日迄、坊守は十二日迄
アメリカへ行つています。ご迷惑お
かけしますがご了承ください。

二日 出石組「運研」(光蓮寺)

六日 住職アメリカより帰国
正法寺追遠法要。數珠弘道氏宅法事。山田 ちゑ
氏宅初盆 成田捷明氏宅落成月

七日 「玉口会」定例法座
永井かめの氏宅初盆

九日 生田俊雄氏宅法事
「玉口会」定例法座

十日 永井かめの氏宅初盆

十一日 坊守帰国
小島健一氏宅初盆。出石町益參り

十四日 原田則昭氏宅初盆。浜明男氏宅初盆・多田徳氏
宅初盆

十五日 奥地塗男氏宅法事。石田隆男氏宅初盆。坪木靖晴氏
十六日 薩山和子氏宅法事。谷垣なつ子氏宅法事。坪木靖晴氏
十七日 平野徳氏宅初盆

十八日 薩山寛氏宅納骨法要

二十日 小島健一氏宅百ヶ日
子ども研修会

二十一日 子ども研修会
二十二日 沢田寿造氏宅法事。仏杜但丹地区研修会(水口)
二十三日 基幹運動本部専門部会(本山)

二十四日 原田則昭氏宅初盆。浜明男氏宅初盆・多田徳氏
宅法事

二十五日 奥地塗男氏宅法事。石田隆男氏宅初盆。坪木靖晴氏
十六日 薩山和子氏宅法事。谷垣なつ子氏宅法事。坪木靖晴氏
十七日 平野徳氏宅初盆

十八日 薩山寛氏宅納骨法要

十九日 小島健一氏宅百ヶ日
子ども研修会

二十日 沢田寿造氏宅法事。仏杜但丹地区研修会(水口)
二十一日 子ども研修会
二十二日 沢田寿造氏宅法事。仏杜但丹地区研修会(水口)

「お盆」のこと

「盆」といふ言葉の源をたどると、「うらばん」「ウラン
バーナ」となります。そしてこの言葉はお盆御供以前にペルシ
ヤから渡ってきた言葉だそです。「ウランバーナ」とは、さ
かづり(御懸)という意味です。

この古い言葉を手にとり、いれて仏様は仏法をお説きにな
りました。

「あなたたち、さかづりになつてしまませんか。ものをさ
かさに見て、それで怒つたり泣いたり喜んでんだりしているので
はありませんか」「ちょっと修行すると、私だけ偉い者になつ
たようになります。少し勉強したら自分がなんでもわかつ
ているように思つて高なります。」

「はい話が、大きくなり偉くなると、自分一人の力でなつた
ようについて、もう、私のために罪をつくつて育てあげてくれ
た父母のご恩などを思い出そうともしない。」

「ひっくりがえった考え方ではなく、まつとうに、私のいのち
を育てているもの、いのちの根源に思いをいたさねばならない」

真如の月の光に照し出されて、みずからを省ることが大切なの
だよと、「安居(あんこ)」という長閑学修会の最後の日に、お
祝迎さまは、お弟子たちにおさとしなつたのです。

「盆」とはそういう意味の日です。

私のお念仏

仏社員 宮嶋千秋

「思かな人とは、自分に示された他人の苦言に対して感謝できない人である。」(法句經)

お寺の今月の掲示ですが、お釈迦さまは三千年の昔に、私のことを見ぬいておしかり下さつていたのだと思いました。感謝できるどころか、他人からの苦言に対しても感謝できる私ではありません。憎んだり逆らひましたかできない私であります。たとえそれが正しい言葉であるとわかつても、私に都合のわるいことなら決して感謝などできなればかりか、長い間おぼえていたらみ通している私であります。全く以て「清流ニ魚住マス」とか申しますが、私は獨りの中にしか住めないかも知れません。私は、獨りのなかで、もがきながら、苦しみながら、また楽しみ喜びながら、そういう人生を味わいながら、生活をしていくと思います。この獨りの中でなければ生きられない私だと思います。

いつか東光寺のご院家さん(東井義雄先生)は

「五獨(ごじよく)の極(きわみ)のなかで」と

いうことを力説してくださいました。

五獨と言るのは劫獨・見獨煩惱獨・衆生獨・命

獨とあります。

私はその一々をとても説明できるはずはありません。が、つまるところ、自分の都合、我(が)の欲を作り出す世界であると思われていたといっています。

この私、この五獨のきわみのなかで生きている

のに間違いなく思います。

この獨りは、だれであろう自分から作り出しているのです。

そして、生きているかぎり、この獨りを去ることの出来ない私だと思います。

その獨りのなかでじか生きることの出来ない私

を、そのままにお救いくださいとお話を聞かせくださいました。

このことにめざめさせていただいた時、このど

うしてみようもない獨りのなかに、いのちの栄養

として、生きる依り處として、はたらいていく

ださる如来さまのお慈悲のおかけで、健健康な心と

からだが保たれているのだと思い、もつたいない

かぎりであります。

南無阿弥陀仏。

五獨のきわみ 開路のなかに 一すじの

南無阿弥陀仏 栄光の綱(つな)

生者必滅 会者定離

仏婦会員 宮嶋幸子

往きて生まれる



仏さまの徳を讃え、感謝の気持ちを表わします。

姿勢を正して一礼をし、一回だけ香をつまみ香炉にくべます。その際、香を額におしいただくことはしません。そして合掌し口に念佛を称え、その姿勢で礼拝します。

焼香

お念仏の呼び声の中に

永代経こころさし

永代経の懇志として次の寄附がありました。御礼の心から報告いたします。

掛軸収納たんす

湯呑	二百箇	小谷	宮嶋	聰子様
本堂用	テレビ・ビデオ	小田	浜	明男様
夏・冬大五条けさ		暮坂	平野	稔様

の世界の「いのち」を終えた亡き人。苦しむ者、迷える者をいつでも、どこでも、見護つていてくださり、すぐつてくださるのが優しい、尊い、阿弥陀如来(ほとけ)さまであります。

阿弥陀さまは、時代や境遇など一切を越えてすべての人を間違いなく救うという願い(他力本願)を完成し、私たちに称えやすい

亡き人との別れの悲しみの中で、南無阿弥

陀仏と称える私たちですが、お念仏の心とは、「心配しなくていいんだよ。

いつでも、どこでも、私がいるんだよ。

護っているからね、必ず救うぞ」

と、阿弥陀さまから私たちに向けての呼び声であります。

死による別れは厳しく淋しいものですが、

今は亡き人も阿弥陀さまに導かれ、お淨土と

いう真美の世界にみほとけとして誕生しました。阿弥陀さまの恵みを仰ぎ、亡き人々は

とけになられたとお念仏称える中に、常に一緒にいてくださる、再びお淨土で会えること

を確認させていただくのが淨土真宗の法会であります。

平和の鐘に

平和の願い

八月四日

午後三時半

お念仏に遇うために、せつかく人と生れてきたその欠けがえのない尊い生命を、大量に無惨に奪つてしまふ戦争は、なんとしてもとめなければなりません。

子どもや孫が戦争にまきこまれないよう願わざにはおれません。

全国の寺や教会で、平和の願いをこめて
鐘をうちならします。

